

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381235

研究課題名(和文) 学校音楽カリキュラム経験の実証的研究 生涯の「学びの履歴」にみる学びの経験の解明

研究課題名(英文) An empirical study of the school music curriculum experience:

研究代表者

笹野 恵理子 (SASANO, Eriko)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70260693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：学校音楽カリキュラムは、学習者にどのように経験されるのか。この問いに支えられて、本研究の目的は、学習者の「学校音楽カリキュラム経験」を解明するものである。本研究では、教師と子どもとの質問紙調査の分析、インタビュー調査の分析を通して、課題を追究した。教師への質問紙調査では、因子分析の結果、教師の学校音楽カリキュラム経験の内容構造を支える因子として9因子を析出した。児童生徒への質問紙調査では、小学校では3因子、中学校生徒では、6因子を探索することができた。教師、児童生徒いずれも集団的な協同的学習を示す因子が析出された点は、日本の学校音楽カリキュラム経験の特質として指摘できる。

研究成果の概要(英文)：What are learners' experiences of the school music curriculum? Based on this question, the current study aims to clarify the school music curriculum experience of learners. This issue was researched through analysis of the results obtained from questionnaire surveys and interviews conducted with teachers and students. After conducting a factor analysis, nine factors were extracted from the surveys administered to teachers as being representative of the teachers' school music curriculum experience. Through the surveys administered to young students, we were able to investigate three factors related to elementary school students and six that related to junior high school students. A factor relating to both teachers and students working cooperatively in groups was identified as a special feature of the school music curriculum experience in Japan.

研究分野：音楽科教育学

キーワード：学校音楽、カリキュラム経験、潜在的カリキュラム、生きられたカリキュラム、経験されたカリキュラム、学びの履歴、ナラティブ・アプローチ、因子分析

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究が着目する鍵概念は、「潜在的カリキュラム」である。本研究は、潜在のカリキュラムが指摘した「教育意図と学習経験の乖離」に着目し、当事者が「実際に学んでいる内容」とその経験産出過程、言い換えれば「意味の再構成過程」に関心を払う。本研究の「学校音楽カリキュラム経験研究」は、潜在のカリキュラム研究の可能性を追究する過程で着想に至ったものである。

(2) 潜在のカリキュラムの発見は、近年のカリキュラム研究の大きな成果であるといわれる (Jackson, P. W.)。潜在のカリキュラムは、「教えられた内容」と実際に「学ばれている内容」のギャップを指摘したことで、カリキュラム概念の再定義をもたらした (松下 2007 田中 2000)。

(3) 近年のカリキュラム研究において、カリキュラムは「学習経験の総体」としてとらえられるようになってきている。端的に言って、この概念の再定義とは、「教育計画としてのカリキュラム」と「学習経験」の関係の問い返しであったといえる (佐藤 1996 松下 2000 木原 2000)。

(4) 教科教育学研究、とりわけ音楽科教育研究においてそのカリキュラム論は、これまで伝統的に、当該教科における教科内容編成方法論に主要な力点がおかれてきたといわれてよい。しかし、ここで今一度ある意図において編成された教科カリキュラムを、子どもの「学習経験」という視点から捉え直してみるならば、教科内容の編み直しが、直にカリキュラムに埋め込まれた「教育意図」どおり、子どもの「学習経験」を編み直しているかを問うことができる (笹野 2012 2013)。

(5) すなわち、カリキュラムの「実質」は、当事者の視点から具体的経験に肉迫しなければ、十分に解明されない。(Erickson, F & Shultz, J. 1992, Pollard, A. 1998 など)。教科カリキュラムにおけるそれも、実際の子どもの「学び」の具体的経験を解明してこそ、当該カリキュラムの効果や成否を確認でき、教科学習の「学び」の意味を明らかにし得る。

(6) 申請者は、以上の課題意識にたって、当事者の経験というレベルからカリキュラム研究をたちあげるといふ研究視角を構想してみた。この研究枠組を用いて、これまで下記のことを明らかにしてきた。

① 学校音楽カリキュラムを「伝達されたカリキュラム」(教師)と「経験されたカリキュラム」(学習者)として別個の視角から解明する研究枠組の構想

② 「伝達されたカリキュラム」における教師の意味付与を規定する文脈の析出とその力学的様相の解明

③ 「経験されたカリキュラム」における子どもの学校音楽カリキュラム経験の内容構造の解明とそれに働く文脈と力学の析出

④ 大学生の回顧による学校音楽カリキュラム経験の意味付与の解明

(7) 本研究では、これらの継続・発展的研究として、これまで十分展開できなかった教師と学習者の経験の意味構築過程の解明に目的を絞り込み、具体的課題を設定した。

### 2. 研究の目的

以上から本研究の目的は、当事者のレベルから学校音楽カリキュラム経験を解明することにある。

本研究では次の2点を具体的な研究課題として設定した。

① 子どもの学校音楽カリキュラム経験の実証的解明

② 「学びの履歴」という観点にたった、学校音楽カリキュラム経験の意味付与の解明

③ 子どもの学校音楽カリキュラム経験を構築するメカニズムの解明

### 3. 研究の方法

(1) 教師の学校音楽カリキュラム経験がどのようなものか、質問紙調査の統計的分析、自由記述のテキスト分析、エスノグラフィックな観察ならびにナラティブ・アプローチによる「語り」の分析を通して実態とメカニズムの分析を行う。

(2) 児童生徒の学校音楽カリキュラム経験がどのようなものか、質問紙調査の分析、自由記述のテキスト分析、ナラティブ・アプローチによる「語り」の分析を通して実態とメカニズムを明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) 教師の質問紙調査の分析を通して、以下のことが明らかになった。

① 回答結果に因子分析を施したところ、教師の学校音楽カリキュラム経験の内容構造を支える因子として7因子が析出された。それらを「協同的学習」「学校音楽効果」「音楽技能」「授業秩序」「音楽認識」「音楽情意」「音楽意味」と命名し、教師の学校音楽カリキュラム経験の内容構造を支える因子としてみなすこととした。これら抽出した因子は、教師が学校音楽カリキュラムを経験する構造的な枠組みであり、教師らは、これらの枠組みから学校音楽カリキュラムを経験している。言い換えれば、教師らはこれらの学校音楽カリキュラムの経験内容構造を有していると考えられることができる。

② ここで析出した7因子を「制度化されたカリキュラム」との関連で考察してみると、これらの因子は、(a) 「制度化されたカリキュラム」に明示されているもので、「制度化

されたカリキュラム」が教師の経験内容を規定したと想定される因子（「音楽技能」「音楽認識」「音楽情意」）、(b)「制度化されたカリキュラム」に明示されないレベルで教師の経験内容を構成した想定される因子（「授業秩序」）、(c)「制度化されたカリキュラム」の内容を含みつつ、教師が独自の枠組みで意味を再規定し、経験内容を構成したと想定される因子（「協同的学習」「学校音楽効果」「音楽意味」）、の3つにカテゴリズされる。「a」は、教科内容編成論の枠組みで多くの研究が蓄積されてきているものであり、「b」は、従来潜在的カリキュラムとして指摘されているものである。ここで特に注目されるのは、「c」の教師独自の枠組みで学校音楽カリキュラムの意味を再規定していると考えられる「協同的学習」「学校音楽効果」「音楽意味」の因子である。これらの因子は、教師が学校音楽カリキュラムの意味を再規定し、意味を編みかえながら経験を構築する教師独自の解釈枠組みとして考えられる。

③ 教師の自由記述分析からは、以下のことが明らかにされた。教科音楽文化を形成する教科授業のキーワードは「関わる」であり、「集団的協同性パースペクティブ」に特徴づけられる。教科授業は、「学校音楽拡張性パースペクティブ」によって「つながる」をキーワードとする音楽行事と相互作用的に経験される。「音楽専門性パースペクティブ」に特徴づけられる部活動は、「進路」を念頭にした音楽の専門性を保障し、教師はそれを教科授業や行事に還元しようとする。教師にとって学校音楽カリキュラムとは、教科カリキュラムに示される「教育内容」だけでなく、こうした学校内の多様な音楽活動の関係性の中で経験され、「生きられたカリキュラム」が構築されていると考えられ得る。

(2) 児童生徒の質問紙調査から以下のことが明らかにされた。

①小学生と中学生の学校音楽カリキュラム経験は異なり、小学生では、「集団的協同学習」「音楽意欲」「音楽的思考」の3因子、中学生では、「協同的学習」「音楽認識」「音楽意欲・情意」「授業秩序」「音楽生活化」「音楽意味」の6因子を探索的因子分析によって探索することができた。これらをそれぞれ児童生徒の学校音楽カリキュラム経験の内容構造とみなすことができる。児童生徒は、これらの枠組みで学校音楽カリキュラムを経験しているといえる。

②それらは、次のようにカテゴリズすることができる。すなわち、a 制度化されたカリキュラムが児童生徒の経験内容を規定したと想定される因子、b 制度化されたカリキュラムに明示されないレベルで児童生徒の経験内容を構成したと想定される因子、c 制度化されたカリキュラムの内容を含みつつ、児

童生徒が独自の枠組みで意味を再規定し、経験内容を構成したと想定される因子、の3つである。

③ 小中いずれも第1因子として「みんなで仲良く」「みんなで楽しく」「友達と協力して」など集団の協同性を示唆する因子が析出されたことは、注目される。この集団性、協同性の音楽学習のあり方は、学校音楽教育の特質として考えてよい。

④ 学校音楽の好嫌、音楽の力がつく、今後音楽とかかわっていききたいかどうか、については、いずれも第1因子「集団的協同学習」（小学校）、「協同的学習」（中学校）が強い影響がある点が明らかにされた。すなわち、児童生徒にとって集団やその集団における学習のあり方は、児童生徒の学校音楽カリキュラム経験の質を強く規定する。特に中学校生徒で注目されるのは、「これからも音楽をしたい」回答結果と各因子の関係においては、「音楽認識」因子は負の影響を与えている点である。

音楽を「わかる」経験と、「これからも音楽をしたい」と考えることは生徒にとってはダイレクトに結びつくものでなく、むしろどのような集団でどのような協同的な学習経験を構築したか、ということのほうが、影響が大きいことが明らかにされた。

⑤ 以上の知見を総合的にみても、次のことがいえる。第一に、学校音楽カリキュラム経験は、小学校と中学校で異なり、小学校では未分化な形で経験されることが実証的に明らかにされた。第二に、小学校でも中学校でも、学校音楽カリキュラム経験は集団的な性質をもつ。すなわち、クラス集団であったり、学校集団であったり、それら集団のあり方、集団における学習のあり方が大きく関係している。関連して第三に、児童生徒の日常の音楽経験の有無が学校音楽カリキュラム経験に大きく関係していることが実証的に明らかにされた。すなわち学校外での音楽経験が、学校音楽カリキュラム経験を規定している。よって児童生徒の学校内外の音楽経験に留意する必要がある。

(3) 教師と児童生徒の自由記述の分析、「語り」の分析からは、教師も児童生徒も多様な学校音楽活動との関係性の中で教科授業の経験を構築していることが明らかである。特に教師は、部活動や行事が教科授業と相互連関が意識できる場合には、それらに積極的な意味付与を行う。児童生徒の場合には、学校外の音楽文化を含む多様な音楽文化との接点がみられる場合に、教科授業に積極的な意味付与をすることが明らかにされた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①笹野恵理子「中学生の学校音楽カリキュラム経験に関する予備的研究 - 質問紙調査の分析を通して」『関西楽理研究』(関西楽理研究会編) Vol. 32、pp. 53-71、2016、査読有
- ②笹野恵理子・中島卓郎・安江真由美・松永洋介・斎藤理加「海外のカリキュラム・学力評価」『学校音楽教育研究』(日本学校音楽教育実践学会) 第20巻、pp. 126-134、2016、査読無
- ③佐藤真由子・笹野恵理子「日本と韓国の学校音楽教育の比較研究(1) - 『制度化されたカリキュラム』の比較」『学校音楽教育研究』(日本学校音楽教育実践学会) 第19巻、pp. 98-99、2015、査読無

〔学会発表〕(計11件)

- ①笹野恵理子「学校音楽カリキュラム経験研究 - 児童生徒の『語り』にみるカリキュラム経験 - 」2017年度第4回近現代教育実践史研究会、2018.
- ②笹野恵理子「学校音楽カリキュラム経験の諸相 - 教師と学習者の経験の差異 - 」2017年度第2回近現代教育実践史研究会、2017.
- ③SASANO, Eriko The experience of school music curriculum: a comparative study of Japanese and Korean curriculum、日韓教科教育研究、2017.
- ④SASANO, Eriko Music Identity and School Music Culture: the experience of school music curriculum、第8回日伊音楽文化研究会、2016.
- ⑤笹野恵理子「個人史にみる学校音楽カリキュラム経験 - 「学びの履歴」のライフストーリー - 」2016年度第1回近現代教育実践史研究会、2016.
- ⑥笹野恵理子「学校音楽教育における潜在的カリキュラムに関する研究 - 教師へのインタビュー調査をもとに - 」第3回近現代教育実践史研究会、2016.
- ⑦笹野恵理子「学校音楽教育におけるカリキュラム経験に関する研究」第2回近現代教育実践史研究会、2015.
- ⑧笹野恵理子「学校音楽を『教える』ことと『学ぶ』ことの諸相(4) - 教師は学校音楽をどう経験するか - 」日本音楽教育学会第46回大会、2015.
- ⑨SASANO, Eriko The comparative study of the school music curriculum of Japan and South Korea、日韓教科研究会、2015.
- ⑩笹野恵理子「生きられたカリキュラムの実証的解明(2) - ナラティブ・アプローチによる学校音楽カリキュラム経験の解明 - 」第4回近現代教育実践史学会、2014.
- ⑪佐藤真由子・笹野恵理子「日本と韓国の学校音楽教育の比較研究(1) - 制度化されたカリキュラムの比較 - 」日本学校音楽教育実践学会第19回全国大会、2014.

〔図書〕(計2件)

- ①吉田武男監修・笹野恵理子編、2018、『初等音楽科教育』(Minerva はじめて学ぶ教科教育7) ミネルヴァ書房、248p.
- ②音楽教育研究会編(笹野恵理子)、2018、『新版初等音楽科教育法』音楽之友社、256p (pp. 20-26)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

笹野 恵理子 (SASANO, Eriko)  
立命館大学・産業社会学部・教授  
研究者番号: 70260693